おいてもこの傾向が強くみられる。生産量においては成木園の増加が期待され、四十五年度においては、温州みかんの十六万ﾄﾝ、全果樹では二十一万ﾄﾝが見込まれる。

なお、全国的には三十九年十月公表の農林省の見通しによると、四十六年における供給率は、みかん九一%、なつみかん一三一%、栗一〇七%が試算され、必ずしも楽観出来ない状況であるから、将来の産地競争の激化はより一層深刻化するものと覚悟しなければならない。

集団桑園

昭和三十五年県は「新養蚕集約振興事業」を打ち出し、生産性の向上を目途とした「省力養蚕」へのスタートを切ったが、昭和三十七年農業構造改善事業の発足に伴い、「養蚕新興産地育成促進事業」に切りかえた。

この事業は、未こん地、開拓地を含む低位生産地帯を重点として、他部門との関連を考えながら土地資源の開発と低生産作物の作付転換による農家所得の増大と、地域産業振興をはかるため、養蚕の集団的、計画的な導入を図り、新興生産地の生産基盤を育成し農業の構造改善ができる態勢を確立しようとするものである。

すでに造成された大規模集団桑園地帯は、三十数ケ所約四〇〇㌶に及んでいる。これらの地帯は菊池、阿蘇、上益城、球磨の山麓、原野、畑作地帯等、新興養蚕地帯の中核団地であって、集団化や農道の新設、改修など基盤の整備、稚蚕共同飼育所、壮蚕共同飼育施設の新画的建設等、共同化、協業組織化を基本線として地域ぐるみの経営構造の改善が大きく進展しつつある現状である。

一方県の施策に呼応して養蚕団体の行なう事業に「養蚕生産地形成協議会」「企業養蚕団地育成事業」があるが、これは既成養蚕地帯の経営規模拡大を含めた集団桑園の造成、新規養蚕地帯の育成を行うものであり、県の指導助長のもとに本県養蚕振興に大きく挺入れを行なっている。

昭和三十五年以降の造成実績を概括すれば一、八〇〇㌶（団地施設を含む）に達し、既成養蚕地帯における経営規模の拡大、合理化とともに、山麓、畑地帯を中心とした本県の新しい養蚕団地が生れつつある。

■ 集団化した桑園

生活改善

農地を集団化することは農業の機械化が推進されるための必須条件であると云うことは常識化されていることであるが、これが仲々実施されにくいことも又常識化されている。たとえば補助金がついても、融資がなされても、農地が祖先から遺された財産であるという、信仰に近い気持を持っている農業者達が「交換分合はしない」「このままでよい」と断固として動かないとしたら、交換分合は単なる空想的理論でしかなくなるわけで、従って農地所有者が、その気になるような措置は根本問題と云えよう。そこで、家族ぐるみの納得と協力は、農地の集団化以前の必要事である。殊に世帯主にとっては主婦達の意識の如何が、隠然たる強力な網となるので、「農業生産の基盤整備は、女のかかわることでない」と云った意識の上に立った農政は基礎のない建物に等しい。

このような観点からすると、形に現われた農地の集団化には、婦人や家族を含めた数多くの要因が総合され、集積されてでき上るものであると云える。つまり農地集団化ができていると云うのは、部落或は、町村においての「農村近代化推進に関する前向きの姿勢」と云う氷山の一角と考えられるのではないかと思う。このことは、集団化によって、労働力の

大削減に成功した上益城郡矢部町犬飼部落の例によっても証することができる。

犬飼部落の基盤整備ができるまでには、相当回数の話合いが開かれている。部落のお宮を会場に、兄弟とか親戚とかの情実にかられることのない喧々たる議論もあったと云うが、話合いがついたら「ポンポン」と二つ拍手できまり、きまったら文句なしに実行に移すと云う民主主義を地で行っている部落の話合いは、生活の合理化の話合いにもまた利用された。正月の祝賀は、公民館に各家族が全部集り、たのしい新年の祝をやることになって、各家庭をまわって飲歩くことは一斉やめることにきめて実行されている。その外、子供の日、母の日にならった父の日、老人の日も、公民館で、婦人会主催で実施している。

このように、一般的にはむづかしいとされて実行できないことが当然のように思われていた難問題「農地集団化」が民主的な話合いでできて、世帯主、主婦の日常生活に「しあわせな味わい」をもたらした体験は、決して農地集団化だけにとどまることはない。正月の行事のやり方にも、家族達をみんな幸にしながら生活して行く習慣作りのくちびにもなったようである。

各家庭にはその家庭らしい衣食住のあり方があり、それぞれの特徴を生かしながら、しかも家族のみんなが幸に満ちながら、田畑仕事にも、家庭生活にも話合いでやって行く態度をつづけたいものであり、個々の家の一人々々に、幸な生活がもっと具体化されることが、残された課題ではなかろうか。

この部落をみて農地集団化が単に農業経営改善に資する手段とのみ考えていたことに少なからず新らたな認識をもたらした。集団化を実施する過程においての婦人の協力が非常に大きな力を持ち、その利益がやがて婦人の生活にはね返って来ると云うことを知ることができた。農地集団化はいわば農家生活改善の根底をなすものであることを……。

ルポ 村の記録

機械導入で分合熱が

＜球磨郡須恵村＞

エンブリーというアメリカの民俗学者の紹介で有名になった須恵村。静かなこの集落でいま着々と農地整備が進んでいる。三十七年度からの第一次分合計画も終り、第二次計画がいよいよ四十年度から始ろうとしている。

この村は何しろ団地数が多かった。分合前では一戸当平均二十も団地があった。（現在では平均四団地）農地がバラバラでは労働力も多大であった。若者たちの間では三十四年頃から耕地整理をやろうという声が起り、研究会も活発に聞いたりしたが、負担金の問題で行きづまった経過もある。こういった動きが個々の農家に波及し、家族会議のテーマにも取り上げられたりしたが実動まではいたらなかった。

たまたま労力節減ということで耕うん機の導入が活発になっていた。と同時に当然の如く農道問題で不便さが目立ってきた。ここで再び交換分合計画が脚光をみて、村の農業委員会の試案を中心に検討会が開かれたりで、話はスムーズに進んだ。事業はいささかの障害もなく達成された。

昔から豊かなこの村では、奉公人を雇ったり、農繁期には大勢の人を動員したりして、労力にこと欠かなかったのが、昨今の若者の離脱や求人難等で労力の節減は余儀ない条件となってきたわけである。

分合をやってよかったという喜びは大きい。堆肥の運般は女の役目だったが、今は主人がテーラーであっという間に運ぶのだ。水路も完備して水はけも上々だし、共同作業が面白いほどよくさばけるのも痛快な話だという。

「たとえ地力が劣って犠牲になっても、団地の合理化が一番です」と農地整備の必要性をしみじみ語る人たちばかりだ。こういった農民意識の形成は、この村の伝統ともいうべき家族会議の習慣から生まれたものだと組合長さんは力説される。いま、交換分合の後にのみ生まれる作柄の競争意欲が村の隅々から満ち溢れてきている。